

KSKQ

イマージュ

2014年2月



劇団態変 30周年 第60回公演

『Over the Rainbow - 虹の彼方に』

# 個の生存のための闘いが 始まる

身体の内底に蠢く生命の叫びをあらわにする、態変の抽象身体表現。  
 極から極を疾走するような、生のジャズ音楽が呼応する。  
 舞台は廃棄所と化した地球。異星から棄てられた孤独な悪ガキたちが、  
 野生の本能を取り戻し、新たな繋がりを見つけていく。  
 それは、混沌の中にあり、混沌をこそ糧とし生きていく勇気を手に入れるための闘い。  
**闘うのは、あなた**

## 身体と生ジャズバンドの即興セッション！

3月21日（金・祝）18:30

3月22日（土）13:30 / 18:30

3月23日（日）13:30

★23日公演終了後はアフタートーク（金満里×倉田めば）

会場 ABCホール（大阪市福島区）

↑詳しい行き方は裏表紙をご覧ください！

前売り 一般 3,500円

学生 2,500円

シルバー 3,000円

障害者介助者ペア 6,000円

当日 4,000円

チケット取り扱い◎劇団態変

TEL/FAX 06-6320-0344

E-mail taihen.japan@gmail.com

HP <http://www.ne.jp/asahi/imaju/taihen/>

1991年9月3日 第三種郵便承認

毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行

来るべき未来へ、乾杯！

何も無くなる、ことは美しいこと、だと思ふ。

物が溢れた、近代国家の縮図のような、この日本で

無い、ことや、失う、ことへの不安・焦りは図り知れず、そんなときに誰しもが物質文明に浸りきっていることを、思い知らされる。

それは、自然の一部だということを忘れた人類が、自ら作り出した文明へ、放射能という人智の及ばぬ危険物質を掘り起こし投げ込み、傲慢な姿として、自然界も支配下に、君臨しているといった錯覚。そして、一触即発で地球の自然を崩壊させてしまう現代人の抱える大罪が、誰の肩にもかかっている、ことが大本にあるのだ。

実際は、自然は宇宙に含まれ、人類も文明もそのほんの一部にしか過ぎないのに。

そんな、人類無きあとのお話、を「ゴミ」として処分される異星宇宙人の目から、描いてみたいと思つた。

勿論これは人間を、欠陥や不具合を起こすか起こさないかで見ると、単なる部品として人間の物（もの）化が進む現代社会の比喩として、宇宙人に登場ねがう。

何もない、ということとは、シンプルだ。

自ずとそれは、原始的な生き残るための闘いとしての生き方、ということ。

それは、現代人の管理しコントロールされることが当たり前、は通用しない。生き合うための共生だということ。

何よりも、サバイバル精神で清々しい、ということ。

若者層に、今回特に、届きたい作品だ。

浮遊せず地に足をつける、ということはどういうことか。

それは、この閉塞した隔離社会に風穴を空ける、こと抜きには見えない虹を追い求める勇氣だ。

ゴミだからこそ、良かったし助かった！

そして、自然に帰って行くことに感謝、である！

二〇一四年二月八日 金満里

← ← ←

### 『Over the Rainbow - 虹の彼方に』

山本公成氏率いるジャズ生バンドとの即興セッションが、大きな見所のひとつ。  
今作にかける思いをお聞きしました

山本公成

ソプラノサクソフ、フルート、磐笛、ネイティブアメリカンフルート、リトアニアフレッチ、民俗笛、創作倍音笛の奏者にして作曲家。1968年のデビュー以来、即興音楽のパイオニア的存在として活躍。ジャズアーティストのみならず、雅楽、文楽、映像アーティスト、画家など、様々なジャンルのアーティストと共演している。

信藤真実

十代の頃よりドラマーとして音楽活動を始め、1995年よりパーカッショニストとして天空オーケストラに参加。数々のフェスティバルやライブ、クラブイベントやお祭り、神社仏閣や平和集会など型にはまらない演奏活動を展開している。

中島直樹

コントラバスの音に魅了され、独学にて音の追求に始まり、より生きた音を求め、現在様々な演奏家、ダンサー、詩人等と、主に即興演奏を通じて交流し活動中。

(1月22日 熊変事務所にてインタビュー)

**司会** 今回、タイトルにある「虹」という言葉から、何を最初にイメージされましたか。

**信藤** 「レインボー・ウォリアーズ(虹の戦士)」という歌があるんです。地球がもうどうしようもなくなっていて、絶対絶命になった時に世界中から虹の戦士たちが現れて、地球を救う、という伝説がインディアンにあつて。

**公成** 「レインボー・ウォリアーズ」といえばデイク・グッドマン、彼はセックスピストルズのプロデューサーで、非常に破壊的なパンクムーブメントを作ったのね。彼は1992年、僕がグラストンベリーフェスティバルに最初に参加した時、グリーンフューチャーズを仕切っていた。もう今はパンクではないぞ、もっと調和的な事を求めなあかんぞ。僕は自転車発電ライブをやったんやけど、その師匠。僕自身、影響を受けているし、信藤も…

**信藤** 僕はパンクが好きで楽器を始めたんですけど、ハードコアパンク過ぎて行き詰まって、「俺の10代暗いなあ…」となっていた。その時にグラストンベリーに誘っていただいて。グリーンフューチャーズ(小型の風力発電、自転車発電、太陽光発電のみを使って演奏・DJを行うフィールド)、核や石油じゃなく自然エネルギーや人力の方が未来あかるいんとかがう? これをメッセージに音楽やりたい、となった。その後、外でお祭りをやっていたら、三方向に虹が出た事がある。「虹の祭り」をやった時にも、大々的に虹が出たりして。それで、虹は、なんか「いけてるよ!」とか、「あんたらOK!」のサインみたいな感じ。

**司会** ミュージシャンはいろんな土地から情報を得て、またそれを音楽に乗せてよその土地に伝えていく、といった役割を担っているみたい…

**信藤** やはり、民族音楽、楽器から入ります。ネイティブアメリカンとか、アポリジニのディジュリドゥとか。

**公成** 僕は今、フィリピンとか。

**信藤** 気が付けば、モンゴロイド…アジアの、蒙古斑が付いている人が住んでいる、太平洋の周り、(手でくるくると円を描く)このあたりが、つながってくる…

**公成** フィンランドや、北の方のラップ人もモンゴロイド。日本の北の方の、ギリヤーク人も。彼らはアイヌの系統やけれど、布の織り方とか、ちよつと違う。それを辿っていったら、シベリアの北の方にも同じ系統の縦横模様の布がある。フィンランドの北の方にいったら「カンテレ」という楽器があつて、あれはアイヌの「トンコリ」と同じ。木の箱に、羊の腸の弦や、馬の尻尾の弦を張ったもの。今は鉄弦になっているんやけど、それがバルト海周辺にある「コックレス」「カンクレス」という流れになって。これもアイヌの「トンコリ」と同じルーツを辿れる。

**司会** 音楽というのは、決まった形をしてないんですね。

**公成** 音楽というのはそういう文化、歴史…例えば笛には、作った人とその歴史、その人たちの崇めていた精霊との出会いが、吹くことによつて、ぶわつ、とくる。息がその中にこもっている。そうやつつながつている…

**金** 今度、公演の舞台で、生で演奏する。ジャズついても、熊変の身体のごめきと。このうごめきは、実際に見ていると逃すのすよね、普通の人が普通に見ている、「ここ」ついているのは気付かない。それを構成して作品にしているの、ミュージシャンが大変やな、未知なる物への挑戦やな、と思つています。この前の稽古で出していた音というのは、本質的な意味での、ジャズやつた。混沌として言葉にならない、一番のしこり。でも何かぶつけてやる、というようなジャンル分けされないもの。それをジャズや、と表現している。エスニックというと、心地よいものとか癒し、ヒーリングのようなものも求められるが、敢えてそういうのとは違うぎりぎりにつきつものを、凝視、やらしてやる、という感覚は一番大事な気がします。

**公成** 今回のシナリオ読んだら、もうスゴい事書いてあると思つた。今、僕らが生かされているのはひどい状況で、このどうしようもない閉塞感、この現実をどうするのか、という時に、もうこうでしかない、これを、死ぬ気でやらなあかん、と。その、ぎりぎりの音の取り出し方、それがこの前の稽古みたいな表現の仕方をやる。緊張と緩和、という言葉があるが、ピークのきつものばかりやっても強調されない。それを際立たせる表現の仕方、コントラストがあると思う。

**信藤** フェスティバルでは、何個かステージがある中にジャズワールド、というくりがあつて。いわゆるジャズの大御所もでるし、民族音楽なんかもあつて、ちよつと幅が広い。自分らがやっている音楽も、そのくりに出させてもらつたりして、そういうものなんかな、と思つている。つまりジャズ、というのはそういう、新しいものですよ。今まで聞いたことのない、体感した事のない、やつているうちに世界が開いてくる…。今回は、ウッドベースの人と、サクセスと。なんかちよつと違う世界。いわゆる民族音楽でもない。

**公成** まさにまぜこぜの、ね。扉開いて、こう、開けたら、ブアー…と、「虹…!!」みたいな。

**一同** それそれぞれ!(盛り上がつて、話は続く)

この日参加できなかった中島さんは…

「コントラバス(ベース、ウッドベース、ダブルベース等、いろいろ名称があります)を使って、生きた音(僕にとつては心にダイレクトに響く音)を出す為に日々精進。僕の場合、字の如く「生音」でなければ難しく、普段は極力アコースティックな音作りで演奏しています。

楽器のセッティングは、音質や弾いた時の感触など、好みで羊の腸でできた弦(ガット弦)を使用しているの、弓で弾く時の、馬のしつぽと擦れ合う音など、動物的な音、獣のような緊張感のある音を出していきたいと思つてます。」



キタモトマサヤ (遊劇体主宰・演出家)

良い芝居を観せられたら悔しい。悔しくてウラヤマシくて嫉妬する。そしてちょっとあこがれる。でも、チキショーって思ってる。負けるもんかと思う。それは私も舞台芸術の創造を生きるための糧（生活のための、じゃない）としているからだろう。

だけど、到底かなわないとカブトを脱がざるを得ない舞台も存在する。劇団態変の舞台は、私にとってまさにその最たるもので、私を打ちのめし、終演後も観客席から立てなくさせてしまう。役者たちによるその身体表現を見よ！そこには言語では決して伝えられないこの世のドラマがある。歴史も国境もなにもかもを超えて飛翔するその身体に、生命の悲哀と生きることの喜びが宿る。宇宙の真理をかいま見せる瞬間がある。

高賛侑 (コウ・チャニューウ) (ノンフィクション作家)

啞然、呆然、愕然……1983年6月、京大西部講堂で上演されたあの旗揚げ公演「色は臭へど」をナマで観たときの心境だ。当時、私も民衆演劇の脚本・演出を随分行っていたが、重度身体障がい者による演劇の出現は想像を絶するものだった。

「役者」が舞台でころがり、踊り、バナナを食う。ただそれだけの「演技」が一般人間社会の営みを異化し、観客に迫る。しかも一見重苦しい前衛劇風でありながら、あっけらかんとした演出で爆笑を誘う。

「態変」がやらかした「大変」な挑戦は必ず演劇界に激震をもたらすだろうと予感したが、事実は私の予想をはるかに超えた。身障者演劇を芸術に昇華させた金満里演出は国際舞台にまで衝撃を与えた。あくなき挑戦のさらなる飛躍を期待したい。

小暮宣雄 (京都橘大学現代ビジネス学部教授)

まだ、態変に出会ってない方へ。

劇団態変を鑑賞するとお得なことがいっぱい。もったいないけど、その一端を紹介しますね。

お得その①：世界的にユニークで、芸術的に卓越したステージライブ体験を誇りにできます。

お得その②：障害のある身体のみならず独自の表現を、驚きつつ心から楽しむことができます。

お得その③：30年の劇団活動の記憶、継続したことの喜びを人びとと一緒に共有できます。

お得その④：劇場ホールに出かけることで、社会の多様性に気づき街歩きが嬉しくなります。

お得その⑤：世界には謎と希望、未知なる未来があることがわかって、心が暖かくなります。

池内靖子 (立命館大学教員)

金満里・劇団態変の身体表現

一生きることが孕む余剰的でエロスに満ちた世界—

金満里は障害者の身体を、「アンチ」ではなく、「違う形として完全に在るもの」と言い切る。目からウロコが落ちる。金はまた、芸術について、「もっともっと可能性っていうものが、はっきりせえへんものの中に、ある」と言う。白黒や〇×と効率的に分類し価値づけるのではなく、「はっきりせえへんものの中」で遊んでみればいい。生きることが孕む余剰的でエロスに満ちた世界に触れる。

劇団態変の身体表現は、近代国民国家の「優生思想」に侵された身体概念を解体し、身体をこれまでにない新しいとらえ方で舞台上に創造してきた。身体の再生と言ってよい。かれらが創り出す世界の中で、わたしたちは未知のわたしやあなたと出会うことができる。

上野千鶴子 (社会学者)

身体を意思に従わせるのか、意思を身体に従わせるのか？

随意であることと不随意であることの境界が溶けてゆく。

何が「美しい」のか、何が「自由」なのか、何が「快樂」なのか…劇団態変のパフォーマンスを見ると、自己と身体との関係について、根源的な疑問が次々に浮かび上がる。ことばのほんらいの意味で、真にラディカル（根源的）な実践だ。

ウォン・ウィンツァン (音楽家・ピアニスト)

劇団態変とのお付き合いは、もう20年以上にも前になる。でも、本格的な出会いがあったと感じる体験は昨年2月に行われた「MIZUSUMASHI」にゲネプロも含めて全6回の公演をガチで付き合ったことだろう。ダンサーたちと、ここまで濃密で、ディープに関わった体験は、私の音楽人生で初めてかもしれない。ダンサーたちも私も、それぞれ命がけの公演をやり遂げた。その掛け替えの無い時間と場所を共有したことは、言うなれば「戦友」とでも言えるような繋がり感がある。

公演中の私の演奏は録音され、ライブCD「MIZUSUMASHI」としてリリースされた。その時の息づきがそのまま刻印されている。ぜひ聴いてほしい。

大野慶人 (大野一雄舞踏研究所代表・舞踏家)

私は金満里と劇団態変の舞台は設立して間もなくから観ています。作品・舞台から、人間の真からの喜怒哀楽を学びました。金満里さんには輝く太陽を感じます。強く、一生懸命生きなさい、と励まされます。ぜひ多くの方々に観ていただきたいと、心から願っています。

### 田口ランディ (小説家)

「人間という着ぐるみを着ている」と思う。このかぶりものを脱いだとき、わたしはいかなる《もの》なのだろうか。劇団態変の舞台にはそういう「問い」がある。答えではなく強烈な「問い」だ。

以前に主宰者の金満里に「なぜ劇団なのか？」と訊ねたことがあった。彼女は態変の舞台が舞踏やパフォーマンスとして評されることを嫌う。そのこだわりこそ態変が発する「問い」の主体なのかもしれない。彼らは肉体を酷使し舞台に立つ。彼らが演じているのは《あたりまえの人間》であり、身体障害者によって演じられた《あたりまえの人間》を視るとき、私は「人間という着ぐるみ」を着て生きている淋しさに落ち込むのである。彼らの身体が《もの》として《語る》のは、着ぐるみの中にある《私》の《ものがたり》だからだろう。「あんたはいつまでその着ぐるみを着てるの？」そう言われている気がしてならない。

### 天鼓 (ヴォイス・パフォーマー)

態変の芝居にはクセがある。主宰者である金満里のみならず役者やスタッフや態変を最真にするファンたちだってクセ者ばかりである。日本中のクセ者が結集している。ひとクセもふたクセもみクセもあるというしつこさだ。ありえない。態変の芝居は、どなたさまにも受けのいいどーでもいいファミレスの味ではない。よって、一度食べると、しっかりはまる。というよりそのとりこ、だわ。パワーのないのったりした味にはもう我慢できないっ、て気持ちになる。ねえ、もうウソで固めたおためごかしの疑似人生とはおさらばしましょ。う。態変の芝居が道案内してくれる。さて、始まり始まり～！ほれ気をつけて。あんたの世界に風穴が開くよ。

### 中山千夏 (作家)

情報誌「IMAJU」の愛読者なんです。  
劇団態変の発信源。刺激的でものすごく面白い。  
残念ながら公演はまだ観る機会がない。  
前衛ボーカルのともだちから魅力的な噂を聞くのみ。  
今に観る日を楽しみに・・・その日のために心身鍛えて。  
ところであなた「IMAJU」読んでます？  
まだなら、ぜひ。公演の感動が倍増すること疑いなし。  
一冊500円。ぜったいおトクでっせ！

### 貫成人 (舞踊批評家)

スイス、ベルンのダンスフェスティバルで態変が「革命」と評されたのは1997年のことだった。その態変が30周年を迎える。この間、多くの者が去来したが、変わらないものもある。社会や時代についての深い洞察に支えられた演出、「健常者」には敵わない妖艶な身体、目標を一つにした多才な人びとの団結、だ。その舞台を観る者は目から鱗が落ち、覚醒し、陶酔する。観客がアーティストを育てるとはよく聞かすが、態変の観客はアーティストに育てられた。かれらに恩返しできる時は今を措いて他にない。

**劇団態変は、旗揚げ以来多くの方の協力をいただき、活動を続けてまいりました。**

**30周年の節目に、これまでにご縁をいただいた方々よりメッセージをお寄せ頂きました。**

(50音順・敬称略)

### 坂手洋二 (燐光群 主宰)

劇団態変さんが三十周年だという。

燐光群も昨年が三十周年だった。

態変の新作「Over the Rainbow ー虹の彼方に」は宇宙を舞台にしているという。それは私が新作で久しぶりに「SF」(……とも言える)に挑んでいることと、符合しているのか？！

エネルギーの塊にして繊細鋭敏、そして懐の深い、金満里さん。集団と共にあるあり方を維持し、なお常に新しい突破口を求めて模索する、あなたと集団の姿勢に、同時代を生きていると感じ、いつも励まされています。

ジャンルや表現の枠を越え、時代や社会の抑圧に正面から立ち向かう劇団態変さんの、新作。心から期待しています。

### 辛淑玉 (シン・スゴ) (のりこえねっと 共同代表)

態変とは「空」だ。

頭が止まる。そう、固定観念がぶっ飛ばされるのだ。

そこには、評論家はいない。人間には、言葉や理屈ではなく感じる力がある。

そして問われるのだ、あなたは、どこにいますかと。あなたの中にどのような感情が湧き上がりますかと。そして、見終わったあとに、リトマス試験紙にかけられた自分を発見する。芸術、表現などという陳腐な言葉はそこにはいない。

### 高橋源一郎 (小説家)

「態変」を見る、という経験

誰でも何かを見ている。その時、その「何か」について考えることはあっても、「見る」ことについて考えることはない。だから、そのことについて訊ねられたら「わたしは××を見た、そして、面白かった」とか「でも、つまらなかった」というように答えるのである。ふつうは。だが、劇団「態変」を見る時には、まったく違ったことが起こる。あるいは、違った経験をするのである。

舞台の上に、異形の者たちが現れる。彼らを初めて見る観客は、思わず目をそむけたくなるだろう。だが、すぐに、いままでも味わったことのない感覚を、視線を強引に奪われるような感覚を味わうはずだ。そして、こう思うに違いない。「見るとは、なんと、恐ろしくも、新鮮な経験なんだ！」と。

三木草子（シニア女性映画祭 主宰）

劇団態変が30周年!!! それはカクメイの30年だ。「態変」を見れば私たちの持つ美意識と表現が革命を起こしてしまう。起こった革命に「態変」はまた創造の変革をつきつける。あたりまえはあたりまえではない。到達点は出発点だ。だからこそその30年。さて次は何を見せてくれるだろう。次が待たれる「態変」だ。さあタイヘンだー!!!

わかぎふ（作家・演出家）

金満里の舞踏について書くことはいつも同じ言葉だ。彼女は、踊ることは空間を支配する力であると教えてくれる日本でも数少ない舞踏家である。

このことに気が付いて以来、私は時々町の中でも素晴らしいダンサーを発見する喜びを覚えた。それは飽きることなく空を見続けている少年だったり、公演にたたく初老の紳士だったり、電車の中で眠りこける赤ん坊だったりするのだが、共通しているのは「いつまでも見ていたくなる」「見ていることが幸せである」という気持ちにさせてくれることだろう。

劇団態変のメンバーが作り出す空間もまた同じ。どこにも無い、しかし確かに目の前にある、見続けたいという本能を掻き立てられる世界。

劇場に足を一步踏み入れたら、きっとあなたもその空気を共有できるだろう。そして気が付けば自分も舞踏の作品の一部になっている奇跡を味わうことになる。「そこに生き、生かされる」それが態変の世界を体験する醍醐味だ。いや本来、舞台芸術全てがそうでなくてはならないのだが、彼らが突出しているの、私はいつも後を追いかけているように思う。

平たく言おう。映画やテレビでは決して出来ない体験はした方が得ですよ!

野村雅一（文化人類学者、国立民族学博物館名誉教授）

はじめて金満里のダンスをみたのはたしか1996年伊丹。大野一雄とのコラボレーションだった。フリルのような皺が刻まれ静かに舞う大野の肉体は散ろうとする花だった。落花は金満里になって地でまた咲き誇る…ようにみえた。生の悲しみと喜び。それから月日を経て、いまわたしは、金満里と劇団態変がはるか慶長年代に、京にあらわれ歌舞伎踊りを踊った出雲のお国としてよみがえらないかとおもう。

畑律江（毎日新聞学芸部専門編集委員）

劇団態変の活動を初めて取材したのは、新聞社で医療や福祉の問題を追いかけていたころのことだ。それから10年近くたって、今度は舞台芸術担当記者として態変に再会した。劇団の名は同じだったが、メンバーそれぞれの顔が、いつの間にか精悍な役者のそれになっていた。そしてその舞台は、アートについての私の固定観念を根底から心地よく揺さぶってくれた。いい演劇とは一体何か、美しいダンスとは一体どんなものなのか、と。

劇団態変がここ大阪で活動していることが、大阪人としてうれしい。態変が生き生きと息づいている限り、私たちの表現は自由だ、舞台芸術にはまだやれることがある—そう思えるからである。

平田オリザ（劇作家）

劇団態変は、文楽と並ぶ大阪の文化遺産であり、未来に向けての文化資産です。

松本雄吉（維新派 主宰）

重力への反抗。自明への反発。反逆する風景。反転するまなざし。その舞台には表現を渴望する激しい身体がある。かぎりなく、自由を求める強い意志がある。眼に見えて魂が、転がっている。魂がおどる。魂が哄笑し、魂が咆哮する。天賦の才、金満里と劇団態変の舞台という宇宙。

山口幸恵

去年5月に稽古見学して、パフォーマーそれぞれの身体表現に衝撃を受けた。『ヴォイツェク』で初舞台。…やってみて、あるがままの自分の体に向かい、動きを深く考えるようになった。身体表現することは楽しい!昔はプールや温泉に行きたくなかった。人前で義足を脱ぐことをしなかった。でも今はやってみてみたい…自分もパフォーマー出来るかなって思えた。金さんの『寿ぎの宇宙』は綺麗、すごく感動した。金さんの動きを観て、身体から出る動きはたくさんの表情があるなと思った。障害者とコミュニケーションする時、集中して体を見るのは初めてで面白いと思った。身体で表現する戸惑いはある。…態変を続けていくことで、自分の気持ちを表現する動きが出来るようになりたい。本番に向けての不安や緊張…それも楽しんで、自分でしか出来ない表現をして、見る人に伝わればと稽古を積み重ねています。

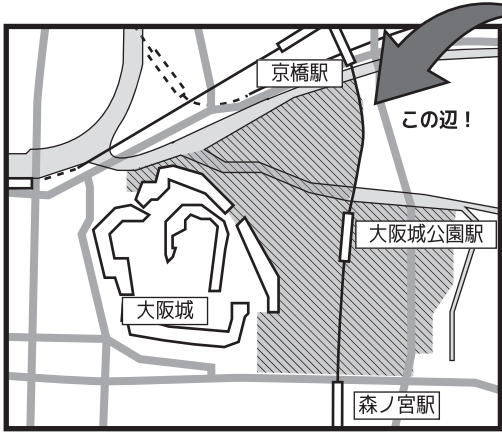
植木智

初めて観た舞台『虎視眈眈』の印象は…小泉さんの力強さとバランス感覚とか、金さんの独特の動きとか、全部が「違う」って感じで凄いなあと…。自分は昔から劇創るのが好きで、高校の時に脚本書いたり、施設の時はずっと劇やったりしてた。稽古見学の時、パフォーマーの演技を見て、自分やったらあつて…やってみた。台本読んで、場面場面の気持ちや状況がわかるなあって…自分の経験の中にあるものだったから、すごく興味を持った。またアクションが大好きで、闘いのシーンがあるのに燃えた!

態変独特の動き…「群舞」とか、「気」は、まだつかめてない…それをいかにつかむかで、もう一歩上に行けるんじゃないかと思う。それは考えても仕方ないから、とりあえず体に任そうと思う。態変30周年記念に出演できることになって、すごく幸せです。「Over the Rainbow」は多様性を意味すると思う。自分自身もトランスジェンダーで、「虹」はセクシャルマイノリティのシンボルでもある。多様性を超えることを一つの芸術にできる作品ではないかと思っている。ぜひ観に来てください。

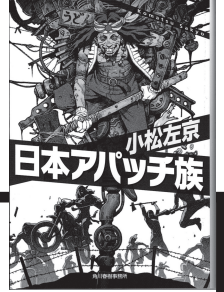
新人パフォーマー、  
態変との出会い。  
そして今!





大阪砲兵工廠（大阪城の東側の広大な敷地にあったアジア最大の兵器工場群）は敗戦前の空爆で広大な瓦礫の山となり、雑草が生い茂り飢えた野犬が徘徊し足を踏み入ると生きて帰れない魔所と化していた。そこに眠る膨大な屑鉄を狙って跋扈したおそるべきエネルギーに満ちた者たちがいた。彼ら、通称「アパッチ族」をテーマに据えた作品に開高健「日本三文オペラ」と小松左京「日本アパッチ族」がある。とりわけ後者は、憲法が変えられ基本的人権が制限され「失業罪」なる罪で人外魔境へ追放されるという憂鬱な近未来が舞台のSF。追い詰められ鉄スクラップを食って生き延びる食鉄人種に変異したアパッチたちが大暴れする活劇だが、1964年に書かれた本作の風刺が50年後の日本を鋭く照射していることに慄然とする。

# アパッチ族



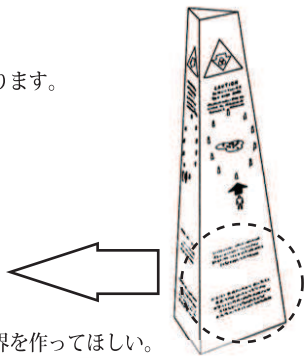
未来のみなさんへ  
ここは21世紀に処分された  
放射性廃棄物の埋蔵場所です。

安全な所に保管する必要があります。  
決して入らないでください。

放射性物質は危険です。  
透明で、においもありません。  
絶対に触れないで下さい。

地上に戻って我々より良い世界を作ってほしい。  
近づかなければ安全です。

幸運を。



over the Rainbow  
虹の彼方に  
Key Word 集

映画「100,000年後の安全」より

## ゴミ捨て星

古事記のしょっぱなに子どもを草舟に載せて流してしまうというショッキングなエピソードが明記されているが、福島原発事故の被災者に対する棄民としかいいようのない仕打ち等みるにつけ、この国は成り立ちからしてそうだったのだし…と悲しくなる。棄てられた側の視点からのみつめなおしも必要かと思い、故・福森慶之助の詩をご紹介します。

## 捨て子

（85年9月）

ふつつつと湧きあがる湯玉  
陸に辿りつきたい  
心もとなく荒波にもまれ  
陽の光恋しく  
ひるむ心を押しやり押しやり  
暗い空を睨み  
舟底に転っていた

身の内奥深く  
遠く近く  
七日七晩轟く音が  
胆も凍りついていて  
舟底に身をすくめ  
いかづちの閃き  
黒い雲が空を駆け  
荒海に翻弄される草舟  
魚火が遠く見えはじめる頃  
目を閉じ潮騒をきいていた  
竹やぶの葉つれ  
水車の音  
父の射る弓づるの音  
母のすすり泣く声  
あれからどう流され漂ったか  
ヒルコに記憶がない

流れついた草舟は  
小さな洞窟に安らいでいた  
潮がひたひたと洞窟の入口を洗っている  
漁火が遠く見えはじめる頃  
目を閉じ潮騒をきいていた  
竹やぶの葉つれ  
水車の音  
父の射る弓づるの音  
母のすすり泣く声  
あれからどう流され漂ったか  
ヒルコに記憶がない

ヒルコの海 I 福森 慶之助  
ヒルコが流され漂った海  
今日も青々と広がっている  
あの鳥影のどこだろう

## 虹の橋

虹にまつわる神話は世界各地に伝わっているが、台湾先住民のセデック族にとっての虹の橋は、死後にそれを渡って祖先の元へ還っていくための大事な橋。ただし、それを渡れるのは血の儀式を経て“真の人（セデック・バレ）”となった者のみである。民族の誇りをかけて、彼らは敵とみなした人間の首を刈る。日本統治下の台湾を舞台にしたアクション大作映画「セデック・バレ」は、彼らのその生を生々しく描いている。自らを文明だと主張する日本人による抑圧下で虎視眈々と民族の尊厳回復の機会を狙い、ついに、悲劇的結末を覚悟の上で大々的に蜂起する（霧社事件）。自分たちの信じる正義を貫き通す生き様に、自分は何のために生きるのか、ということを問わずにはいられない作品である。



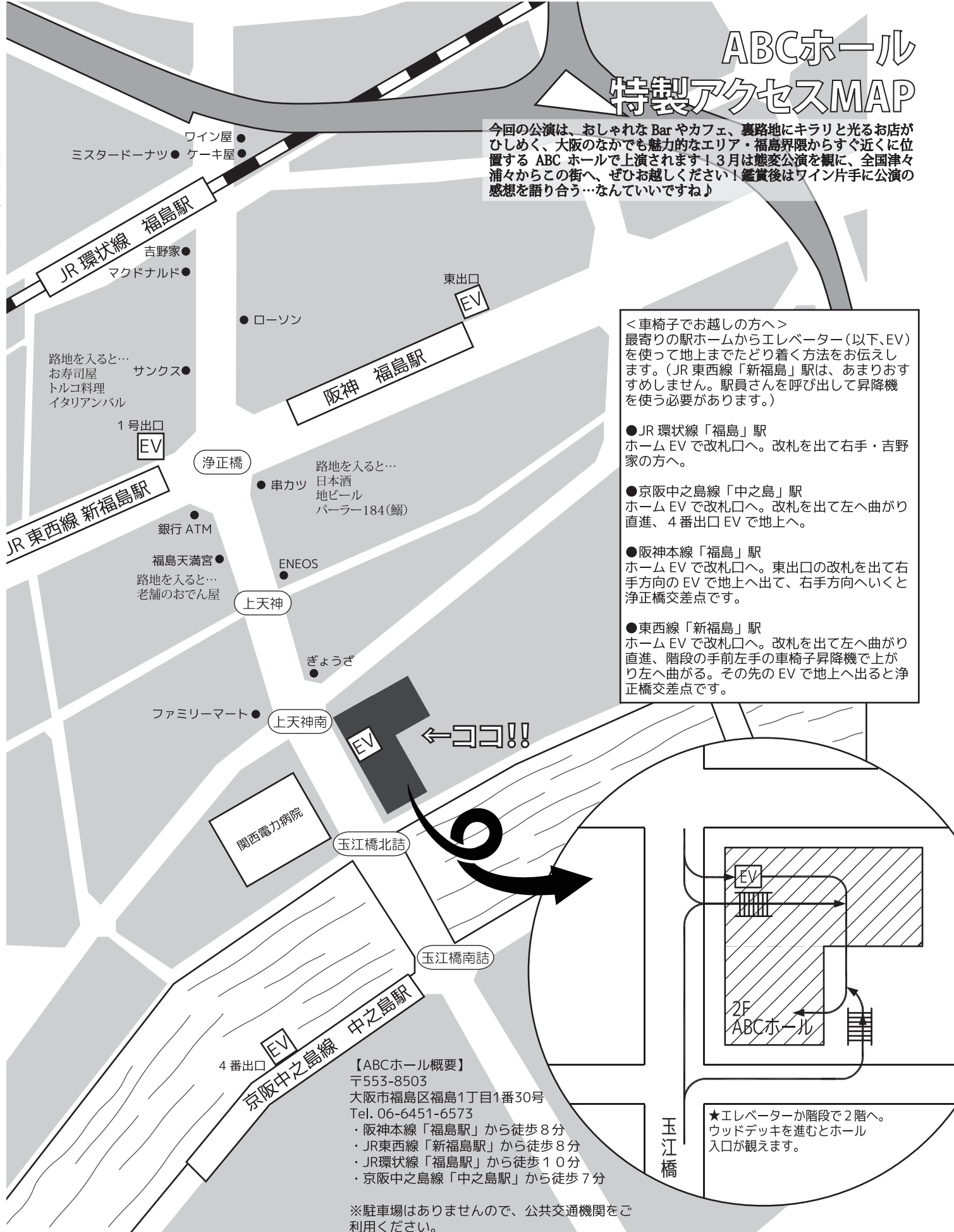
1991年9月 第三種郵便承認 毎月(1・2・3・4・5・6・8の日)発行

# ABCホール 特製アクセスMAP

今回の公演は、おしゃれな Bar やカフェ、裏路地にキラリと光るお店がひしめく、大阪のなかでも魅力的なエリア・福島界隈からすぐ近くに位置する ABC ホールで上演されます！3月は態変公演を観に、全国津々浦々からこの街へ、ぜひお越しください！鑑賞後はワイン片手に公演の感想を語り合う…なんていいですね♪

<車椅子でお越しの方へ>  
最寄りの駅ホームからエレベーター(以下、EV)を使って地上までたどり着く方法をお伝えします。(JR東西線「新福島」駅は、あまりおすすめしません。駅員さん呼び出して昇降機を使う必要があります。)

- JR環状線「福島」駅  
ホームEVで改札口へ。改札を出て右手・吉野家の方へ。
- 京阪中之島線「中之島」駅  
ホームEVで改札口へ。改札を出て左へ曲がり直進、4番出口EVで地上へ。
- 阪神本線「福島」駅  
ホームEVで改札口へ。東出口の改札を出て右手方向のEVで地上へ出て、右手方向へいくと浄正橋交差点です。
- 東西線「新福島」駅  
ホームEVで改札口へ。改札を出て左へ曲がり直進、階段の手前左手の車椅子昇降機で上がり左へ曲がる。その先のEVで地上へ出ると浄正橋交差点です。



【ABCホール概要】  
〒553-8503  
大阪市福島区福島1丁目1番30号  
Tel. 06-6451-6573  
・阪神本線「福島駅」から徒歩8分  
・JR東西線「新福島駅」から徒歩8分  
・JR環状線「福島駅」から徒歩10分  
・京阪中之島線「中之島駅」から徒歩7分

※駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。

発行人：関西定期刊物協会／大阪市天王寺区真田山2-2 東興ビル 4F

編集人(返送先)：イマージュ 和田佳子 川崎那恵 栗園香 仙城真 金満里 慎尚男

〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路 1-15-15

tel/fax 06-6320-0344 e-mail taihen.japan@gmail.com

定価 50円